論　説

酪農学園大学における獣医学教育の取り組み

竹花一成†（酪農学園大学学長）

酪農学園大学は1964年に生産動物医療に従事し酪農家を支援できる実践的な獣医師を養成することを目的として酪農学部獣医学科を開設し，実学教育を柱とした獣医師養成教育を開始した．本学科開設後，わが国の獣医療を取り巻く状況は刻々と変化し，その都度時代の要請に応えるかたちで対応してきた．本学獣医学群は，獣医学科創設50周年を迎えた2014年に「酪農学園大学獣医学群改革基本方針」(2015年3月発行）を策定し，20年後の理想像に向け獣医学教育の改革を日々進めている．本稿では，酪農学園大学の獣医学教育におけるこれまでの取り組み，現在そして将来の取り組みについて紹介する．

1　これまでの取り組み

1963年　9月　「酪農学園大学酪農学部獣医学科増設に関する協議書」を文部省へ提出
1964年　1月　獣医学科設置認可受理
　　4月　獣医学科を開設（教員数5名）
1965年12月　獣医学科校舎が完成（教員数8名）
1967年12月　附属家畜病院を開設（教員数12名）
1969年11月　健体解剖室が完成（教員数14名），獣医学教育の基本施設の整備
1975年　4月　獣医学研究科修士課程開設，9月に附属家畜病院の新築（教員数22名）
1978年　4月　大学院修士積上げ6年制獣医学教育への移行（教員数26名）
1981年　4月　大学院博士課程開設（教員数33名）
1982年12月　ラジオアイソトープ実験研究棟の竣工（教員数39名）
1984年　4月　獣医学6年制教育開始（教員数40名）
1992年　8月　「大動物臨床センター」竣工（教員数46名）
1996年　4月　獣医学部獣医学科を設置（教員数49名）
2004年　4月　参加型臨床実習の実施を考慮した附属動物病院の竣工と同時に臨床系教室を大講座制（生産動物医療学教室と伴侶動物医療学教室）に再編
2005年　4月　部門体制（生体機能学分野，感染病理学分野，衛生環境学分野，生産動物医療学分野，伴侶動物医療学分野）による獣医学教育を開始（教員数53名）
2008年　4月　獣医療の高度化と多様化に対応すべくカリキュラムを大幅に改訂し専修教育（参加型臨床実習を実施する教育体制）を導入（教員数54名）
2011年　4月　チーム獣医療を側面からサポートする動物看護師の養成を目的に獣医学群(部)を2学類（科）に再編し，獣医学類に加えて獣医保健看護学類(教員数8名)を新設
2012年　9月　農林水産省が整理した獣医師法第17条の考え方に従い「参加型臨床実習ガイドライン」を策定し，生産動物医療学分野と伴侶動物医療学分野の所属学生（1学年約50名）を対象に附属動物病院を利用した参加型臨床実習を専修教育として開始（教員数54名）

2　現　　在

本学は1964年獣医学科設置以来教育体制の充実・強化を絶え間なく実施し，産業動物獣医師や公務員獣医師など社会的要請の高い領域に獣医師を輩出することで，日本の獣医療の発展と向上の一翼を担ってきた．しかし，現在の獣医学教育を取り巻く環境はさらに急速に変化しつつあり，品質の優れた動物性食品の生産と安定供給のための予防獣医学，食品衛生・環境衛生や人獣共通感染症の制御など人の健康保持や環境保全，生命倫理・福祉や人と動物の絆の確立など，より多様化する社会的ニーズに対応した獣医学教育が求められている．また，日本の獣医学教育は欧米諸国と比べ，公衆衛生，臨床分野の教育体制が不十分であるなど，国際的通用性が十分確保できていないとの指摘もある．さらに，本学のような地方の高等教育機関は，地域社会の知識・文化の中核として，将来に向けた地域活性化の拠点としての役割を

† 連絡責任者：竹花一成（酪農学園大学）
〒069-8501　江別市文京台緑町582　☎011-386-1111　FAX 011-386-1214　E-mail : takechan@rakuno.ac.jp

担うことも求められている．

本学では，このように多様化・高度化する獣医学領域での社会的ニーズに対応し，獣医学教育における本学の個性と特色をいっそう明確にするため，2011 年 4 月に新しい獣医学の教育体制として獣医学類と獣医保健看護学類の 2 学類からなる獣医学群を設置した．本学の獣医学教育は，獣医学類と獣医保健看護学類の 2 学類の連携を通してさまざまな分野において求められている広範囲な専門知識とチーム獣医療を実践できる技術を有した人材の育成を教育の基本方針とし，この方針に則りアドミッションポリシー，カリキュラムポリシー，及びディプロマポリシーをもって獣医学教育を行っている（表）．獣医保健看護学類では獣医師をサポートし伴侶動物，生産動物におけるチーム獣医療を推進できる動物看護師だけでなく，動物看護師が自ら関われる栄養や行動矯正，理学療法分野など新しい関連分野の教育，そして本学の特徴である生産動物分野で活躍できる動物看護師の日本における本格的な育成も進めている．

本学では，獣医学教育モデル・コア・カリキュラムに対応するため，2016 年度より始まる獣医学共用試験に参加し，2017 年 4 月から斉一教育での参加型臨床実習，「病院実習専修コース（5 年後期，6 年前期，選択 1 単位）」を全員（1 学年約 120 名選択）に実施することとしている．また，カリキュラム改定により 2015 年度以降の入学生には「クリニカルローテーション（5 年前期，3 単位）」を開講する．これらの斉一教育での参加型臨床実習の開講に向け，2018 年度までに 10 名の嘱託助手（雇用期間最大 5 年間の期限付き）を計画的に採用予定である．さらに，斉一教育参加型臨床実習を展開する教育施設として，附属動物病院の改修と「臨床獣医学教育研究棟（2016 年 2 月竣工）」を増築し，改修後には「酪農学園大学附属動物医療センター」として生まれ変わる．この「動物医療センター」は，2017 年度より始まる獣医学類学生の斉一教育での参加型臨床実習で活用されるとともに，臨床研究，臨床研修を含む各方面の卒後教育，アジア各国の獣医系大学学生や臨床獣医師の臨床研修にも活用される予定である．

そのほか，本学獣医学類では，国際感覚豊かな人材の育成を目的として，2014 年度より北海道大学，東京大学，及びタイのカセサート大学とともに文科省の世界展開力強化事業「日本とタイの獣医学教育連携～アジアの健全な発展のために」に参加し，カセサート大学獣医学部との間で獣医学生の単位互換短期留学を展開している．

また，本学獣医学類の衛生・環境学分野は，2014 年 5 月 OIE 総会において，東京大学の「食の安全・研究センター」とシンガポールの「獣医公衆衛生センター」とともに，3 機関で一つの OIE 食の安全ジョイント・コラボレーティングセンターに指定された．本学の役割としては，特に生産現場から食卓までの安全な食品生産の協力支援が期待されており，OIE の本部で行う研修会への専門家派遣のほか，コラボレーティングセンターとして国内外での研修会開催や国際共同研究活動を実施している．

一方，国内においては，本学が締結した地域協定の下

表　酪農学園大学獣医学群のアドミッションポリシー，カリキュラムポリシー，及びディプロマポリシー

アドミッションポリシー：獣医学群は酪農学園設立の基本理念（三愛精神・健土健民，実学教育）に基づき，獣医学と獣医保健看護学並びにその関連科学の教育を通して生命・自然を尊ぶ豊な人間性を育み，人類と動物の福祉及び動物・人・環境の調和と共存に貢献する教育を実施し，専門知識・技術及び総合的な判断力を養成し，国際的視野に立って動物と人の健康保持，食料の安定供給及び環境保全に寄与することのできる人材を養成することを目的として教育を行っている．したがって，建学の理念を理解し，獣医学群の教育目的に対応できる人材を入学させる．

カリキュラムポリシー：獣医学と獣医保健看護学並びにその関連科学を創造的に発展させ，その成果を教育・研究並びに普及活動に反映させる．また，臨床とその基盤となる諸科学の教育を通して，創造的かつ実践的獣医師，獣医保健看護師となりうる人材を育成する．さらに，幅広く深い教養と専門知識・技術及び総合的な判断力を涵養し，健全で人間性豊かな生命観と社会的使命感をもった人材を育成する．

①基盤教育では建学の精神を理解させるとともに，幅広い教養と豊かな人間性を涵養する．
②2 学類で共通の専門基礎教育を展開することで，獣医療の基盤となる知識を共有する．
③各学類での専門教育・専修教育において，卒業後の進路に応じた教育を展開する．
④社会のグローバル化，高度化・複雑化に主体的に対応し，自ら課題を探求し，その課題解決に対し幅広く，柔軟かつ総合的に判断できる力を養成する．
⑤人類と動物の福祉及び動物・人・環境の調和と共存を考えるためには世界的な視野が必要であり，また急速に変化する国際情勢に対する通用性を有する人材を育成する教育を実施する．

ディプロマポリシー：獣医学群では酪農学園設立の理念に基づき，現在まで産業動物獣医師など社会的要請の高い領域に多くの人材を輩出してきた．今後もこれらの分野における特徴ある教育を受けた人材を卒業させるとともに，各分野において必要な生命科学の基礎を理解した上で，群管理に基づく予防衛生教育，伴侶動物医療分野での先端的高度獣医療，公衆衛生分野での食品や環境衛生，人獣共通の新興感染症対策，人の健康に貢献するライフサイエンス分野，動物と人の福祉分野など社会的ニーズの高い領域において質の高い実践能力を備えた「高度職業人」として，また，獣医師並びに獣医保健看護師として連携してチーム獣医療を担うことができ，さらにそれぞれの分野や地域においてリーダーとして活躍できる獣医療従事者を卒業させる．

＊酪農学園大学ホームページ「獣医学群の教育基本方針」より（http://www.rakuno.ac.jp/outline/idea/educationpolicy/p0101/p0103.html）

に5年次後期及び6年次前期の専修教育において以下の参加型臨床実習を展開している．2012年6月に本学が北海道遠軽町，湧別町，佐呂間町，オホーツク農業共済組合，えんゆう農業協同組合，湧別町農業協同組合と結んだ「地域総合交流に関する協定」のもと，生産動物の臨床獣医師としての問題解決能力を養う「オホーツク臨床実習」を展開している．また，伴侶動物医療の専修教育では2015年7月に本学と札幌市との間で締結された「連携と協働に関する協定」のもと，札幌市動物管理センターのシェルターメディスンとして，収容猫並びに収容犬の避妊・去勢手術を実施している．加えて，伴侶動物医療の専修教育では，北海道獣医師会並びに羽幌町からの要請で天売島野猫の避妊・去勢手術を実施しており，術後の野猫の馴化飼育について獣医保健看護学類が動物看護教育の一環として協力している．さらに，2014年10月に酪農学園と北海道が締結した「包括連携協定」のもと，家畜衛生・公衆衛生の参加型実習の構築を目指して「臨床獣医学教育研究棟」に「北海道－酪農学園連携家畜保健衛生対策室」（仮称）を開設し，関連する各方面との連携強化を推し進める予定である．

また，獣医師の職域・地域偏在により，産業動物の診療を行う獣医師や都道府県の家畜保健衛生所の家畜防疫員などの確保が進まない地域があるため，本学は農林水産省が取り組む「獣医師養成確保修学資金貸与事業(注)」（以下「修学資金」という）に積極的に協力している．来年度からは，本学と地域交流協定を結んでいるオホーツク地域が修学資金を活用し，地域の産業動物獣医師の確保を始めることを検討しており，本学も地域の獣医療提供体制整備に貢献するものである．

(注) 獣医学課程の大学に進学し，卒業後，産業動物獣医師，家畜保健衛生所等の獣医師を目指す高校生等に修学資金を貸与．

3 将　　来

本学獣医学群は,「酪農学園大学獣医学群改革基本方針」(2015年3月)を策定し，「“One World, One Health”を実践できる総合的な知識を持つ“人財”を育てる , 大学になること」を20年後の理想像とし，

(1) 社会貢献できる獣医学及び動物看護学の教育及び研究
(2) 先進的で総合的な獣医学及び動物看護学の教育及び研究
(3) 国際化に対応した獣医学及び動物看護学の教育及び研究

の三点に主眼をおいて，獣医学教育の改革を進めていくこととしている．

(1) 社会貢献できる獣医師及び動物看護師を育てるため，「生産動物医療」,「公衆衛生」，及び「伴侶動物と人の福祉」の分野において，
①「生産動物医療」では，臨床獣医師と包括的な連携を図り，社会において必要とされる獣医師を育成するための学生教育を展開するとともに，生産動物領域における動物看護師の職域の確立と育成を図り，生産動物臨床現生産現場の課題解決に向けた基礎・臨床・応用研究を強く推進すること
②「公衆衛生」では，わが国における食品の安全を確保し国民の健康を担保するため，高度な知識と技術を有する獣医師を育て，国民の食生活を守ること
③「伴侶動物と人の福祉」の分野では，動物と人の福祉に対して正しい知識を持って貢献できる人材（獣医師，動物看護師）を育てること
を目指す．

また，本学では，特に酪農地域との十分な連携を図る中で実学を主体とした学生教育を推進し，その成果をそれぞれの地域に還元することを目指すとともに，地域産業の振興とその恒常的な発展に寄与することを目指している．

(2) 先進的で総合的な獣医学及び動物看護学を教育するため，Evidenced Based Medicine（EBM）と予防医学の実践，国際水準に見合った獣医学教育の提供，及び実学教育（実践的な臨床教育）を行える場の提供を目指している．また，獣医学及び動物看護学の教育及び研究において㈠社日本私立獣医科大学協会内での連携を模索している．

(3) 国際化に対応した獣医学及び動物看護学の教育及び研究を実現するため，海外の大学との単位互換制度導入による学生の派遣及び受け入れを推進し，さらに外国人教員の登用や長期受け入れ制度の確立を目指している．また，獣医学教育の国際認証の取得について，時期や体制を見据え，議論を重ね実行していくこととしている．

以上のように酪農学園大学獣医学群・学類は，長期・中期・短期的な明確な目標を定め，それに向かって日々改革に努力している．しかし，教育の基本はキリスト教教育を柱としての人間教育であり，「動物の専門家である前に人であれ」を基礎としていることは何ら変わらない．このことは今後の獣医学・動物看護学教育の発展において，よりいっそう重要になる教育ポリシーと考えている．そのために学生とのコミュニケーション，相互理解を最重要視した教育研究活動を行っている．